

市内企業・団体による SDGs に関する取組み事例の発信

(滑 川 市)

提案・指導教員 富山県立大学 教養教育センター 准教授 清水 義彦

(参加学生) 高野 響一(1年)、宮田 英寿(1年)、金戸 綾太(1年)、江守 利輝(1年)
高橋 優介(1年)、高尾 宣伸(1年)、堀田 遥斗(1年)、生駒 敦己(1年)
結城孝志朗(1年)、山北 謙信(1年)、武田 尚恭(1年)、出越 蓮(1年)
島田 大道(2年)、太田 侑平(2年)、島 健太(2年) ほか TA3 名

1 課題解決策の要約

令和元年度 1 年生(以下、「元年度生」)は、平成 30 年度 1 学生(以下、「30 年度生」)、29 年度 1 学生(以下、「29 年度生」)が滑川市との協働で築いた流れを引き継ぎ、今年度の課題に取り組んだ。

以下、事業のスタート時からの流れを示し、過去 3 年間の概要を記す。

(1) 参加学生

この事業は、1 年次の選択必修科目「教養ゼミ」で実施しているゼミ活動であるため、毎年全く違う 12~13 名の学生が滑川市に入り、課題に取り組んでいる。今年度は、元年度生をアシストするティーチングアシスタント(以下、「TA」)として、30 年度生 3 名が経験を活かしサポートに入った。また、今回新規の冊子作成原稿の推敲作業では、さらに 3 名がサポートに入り、合計 18 名の学生が今年度の地域課題解決事業に取り組んだ。

(2) 発信内容

過去 3 年間の課題共通点は、「移住促進に向け滑川市の魅力を若者目線で発信する」と捉えている。

H29 年度:課題は、「首都圏の 20-30 代の子育て世代の移住」の促進に向け情報発信であった。

移住前にまず滑川足を運ぶ「交流人口」を増やすという目的で、滑川市の魅力を「ひと(活躍している人)」、「こと(イベント・行事)」、「しぜん(美しさ)」の 3 点に絞り込んだ。

H30 年度:課題は、29 年度と同じであった。そこで 29 年度生の反省をもとに 30 年度生は滑川市の魅力は、他の自治体にはない「充実した子育て支援策」であると捉え、市内 15 すべての幼稚園、保育所、認定こども園を取材し、待機児童ゼロはもとより各施設の充実ぶりをまとめた。また、全国的に注目を集める児童館、子ども図書館の魅力もまとめ発信した。

R 元年度:課題の切り口が変わった。先進的に「持続可能な発展目標」(以下、「SDGs」)に取り組む企業・団体が滑川市に魅力になると捉え、12 か所を取材し、まとめて、発信した。

(3) 情報発信媒体

「オンラインガイドブック」として滑川市の魅力を web 上で発信している。今年度は加えて、冊子化した。

H29 年度:ホームページ「他県から来た若者が創るオンライン・ガイドマップなめりかわ」を構築

H30 年度:29 年度に加え、ソーシャルネットワーキングサービス(インスタグラム、ツイッター)を活用

R 元年度:過去 2 年間の発信媒体に加えて、A5 サイズの冊子「SDGs なめりかわ」(26 頁)」を発刊

(4) 成果

持続可能な社会づくりに取り組んでいることが市の魅力となり、滑川市が目指す「首都圏の 20-30 代の子育て世代の移住」の促進につながると捉え、今年度は市職員、企業・団体、清水ゼミ生が、2030 年までに解決が求められる「SDGs」の存在意義を理解し、今後の広がりの下地ができたことが成果と考える。

2 企画・実施の目的

滑川市が目指す「首都圏の20-30代の子育て世代の移住」の促進に向け、市内の企業・団体がSDGsに取り組んでいる事例を発信する過程でそれぞれの理解が深まることを目指した。人口減など課題の多い地方自治体で、持続可能な社会の実現に向けSDGs達成に取り組む企業・団体の存在が移住先を探す人には魅力的に映ると考えた。そしてSNS、冊子と2つの媒体で発信することで発信力を高めようと試みた。

3 企画・実施の内容

清水ゼミ12名(機械3名、知能3名、電子情報4名、医薬品1名、環境・社会基盤1名)は、以下の木曜午後13:10-14:40の教養ゼミの時間で取材→原稿作成→発信へ活動を行った。移動は、大学所有バスを利用し移動費をゼロにできたことはメリットであった。

表1スケジュール ●印はバス使用予定日 AL室はアクティブラーニング室の略

回	日	授業内容	詳細	備考
1	10月3日	オリエンテーション	ゼミのゴール、展開を共通理解 SDGs 事前学習	AL室
2	10月10日	●SDGs 講座	13:00-15:00 滑川市職員とチームを組み受講 SDGs への理解を深める	バス使用
3	10月17日	●取材対象決定	13:00 滑川市役所職員と取材先を絞り込む	バス使用
4	10月24日	●取材	事前にアポを取り取材。原稿作成 10月30日〆切	バス使用
5	10月31日	学校行事	モノづくり見本市に参加	テクナードーム
6	11月7日	冊子製作1	原稿フォーマットに書いたデータを流し込む	AL室
7	11月14日	学校行事	SDGs 環境講演会 講師:(株)大和総研 研究主幹 河口真理子 氏	小杉文化ホール
8	11月21日	冊子製作2, 3	各自の担当ページを仕上げる(〆切11月30日) 必要なら、各自で追加取材に行く	AL室
9	11月28日			
10	12月5日	最終作業	全体の校正を確認、SNS 上で発信	
11	12月12日	発表会準備1	ポスター、発表スライド作成1	
12	12月19日	発表会準備2	ポスター、発表スライド作成2	
	12月26日	冬休み		
	1月2日	冬休み		
13	1月9日	リハーサル	発表練習	AL室
	1月16日	金曜授業	授業なし	
14	1月23日	●報告会	ポスター発表、制作した冊子披露	バス使用
15	1月30日	学内発表会	COC 成果発表会でポスター発表	大講義室

活動の詳細を以下に記す。

- ・10月10日・・・滑川市職員とゼミ生が2対1でチームを組み2030カードゲームでSDGsの理解を深める。
- ・10月下旬・・・学生は職員の力を借り取材先を絞り込み、各自でアポを取り取材・原稿作成を始めた。
- ・11月4週間・・・毎週金曜に学生が修正稿提出→TAが週末に修正・返却→木曜は検討会、を繰り返す。
- ・12月4週間・・・デザイナー、印刷業者と毎週原稿のやり取り、修正作業を繰り返す。

並行して、ポスター制作班、発表担当班、工程表作成班に分かれ、発表準備に入った。

- ・1月下旬・・・報告・発表。滑川市役所で職員、取材先に最終報告し、翌週は学内成果発表会で発表。

以下の図1～図4に12名の学生と6名のTAが制作した冊子を示す。

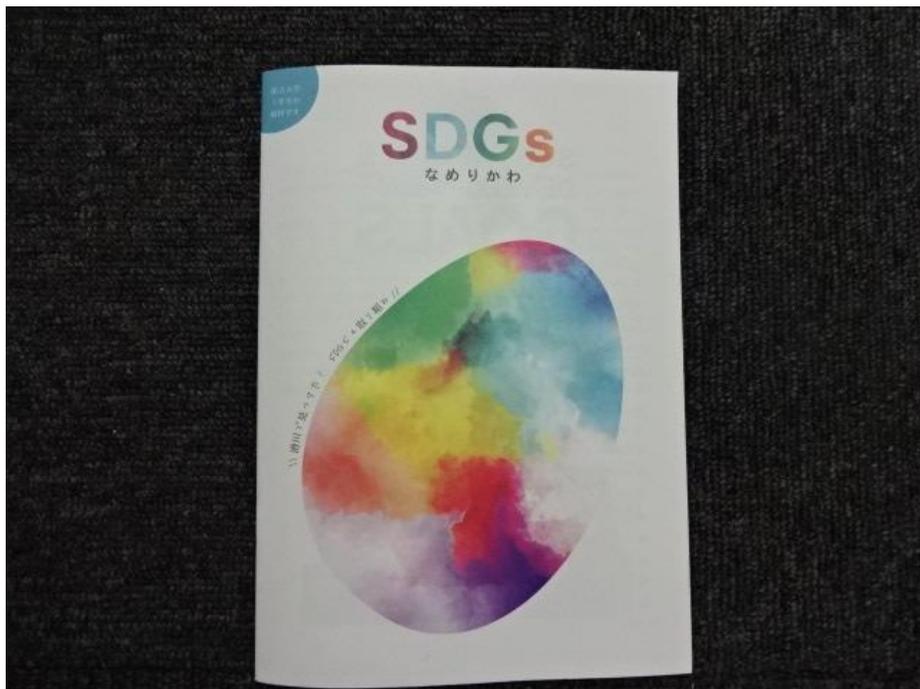


図1 令和元年度生が制作した冊子の表紙(12人12色の卵、ここから何が生まれるか?)

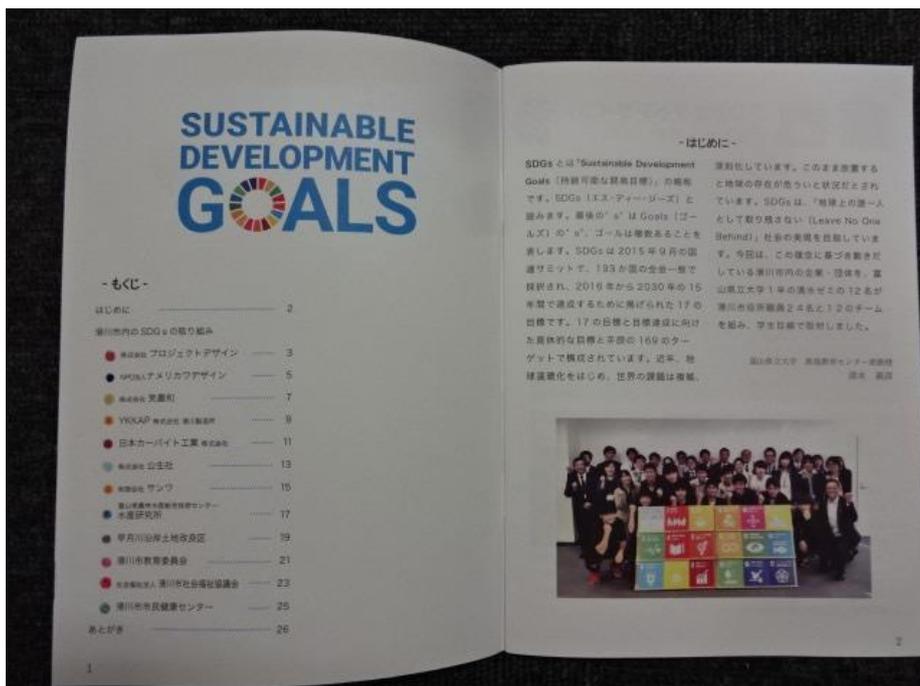


図2 取材先と制作にかかわった清水ゼミ生(12名)と滑川市役所職員(24名)



図3 記事1(ごみ処理、環境保全に取り組む企業)



図4 記事2(充実した子育て支援策)

4 企画・実施の成果

1 頁にも記したが、持続可能な社会づくりに取り組んでいることが市の魅力となり、滑川市が目指す「首都圏の20-30代の子育て世代の移住」の促進につながると捉え、今年度は市職員、企業・団体、清水ゼミ生が、2030年までに解決が求められる「SDGs」の存在意義を理解し、今後の市内での広がりの下地作りができたことが今回の企画の成果であると思う。即効性はないが、今後の波及効果に期待したい。図3~4の通り、各記事の右上に各取材先が取り組んでいると学生が判断したSDGsアイコンを付した。企業・団体がこれを見て、各企業・団体の日常業務がSDGs達成に貢献していることを認知できたことが成果と読み取った。以下は、取材担当者から届いたコメントである。

- ・自分たちもSDGs達成に向け取り組んでいるだとわかった。知らなかった。正直びっくりした。
- ・SDGsに取り組まないといけないとわかってはいたが、「どこから」、「何を」ははじめればいいのかと悩んでいた。学生さんの記事を読んで、もやもやとした霧が晴れた。
- ・SDGsに取り組むということは、「何か新しいことを始めないといけない」、「負担が増える」と思っていた。そうではないということが分かりありがたかった。学生さんに感謝!
- ・理解できた。すっきりした。自社の強みを活かして、SDGsで新たなビジネスモデルを構築したい。

このコメントから学生たちは、自分が何か社会の役に立ったのではないかと、という手ごたえを感じたようである。また、市の職員の方々は、ゼミ生と同様かなりの割合で「SDGsという言葉を知らない、理解できていない」レベルだと10月のSDGs講座を筆者が担当した時にわかったが、それからわずか2ヶ月後に上記の冊子が職員とゼミ生の協働作業で完成できた。滑川市の行政担当者がSDGsへの理解を深めることができたことは、SDGsの理念が今後の市の計画・施策にも反映され、滑川市民が享受できるメリットへとつながる好循環が期待される。

5 企画・実施に基づく提言

今年度は取材情報を冊子化した。持続可能な発展目標であるSDGsは2030年までに解決が求められており、その実現にはまず市内でのSDGsへの認知度と共感度を全世代にわたって上げることが重要と考えたからである。本事業のターゲットである「首都圏の20-30代の子育て世代」にプラスα世代を加え発信すべきと判断した。周囲の反応から今回の判断の妥当性を感じている。本事業では今後も情報発信の対象を想定し適切な発信媒体の選択をし、必要な人に必要な情報を届けていく。情報発信は、其々

の媒体が持つメリットと特性を活しハイブリッド型の情報発信がより効果的であると改めて思われる。

6 課題解決策の自己評価

今年度の取組の自己評価に関しては、事業を通して学生がどう変わったかという視点で記す。毎年違う学生を束ね活動しているが、経験とともに年々活動の質が深まるが、と同時に学生への負担が増えている。今年度の学生は、全く知らない地で大人相手に取材し、全く知らなかった SDGs の取材記事をまとめた。集めた情報を明文化し言葉を精選していく推敲作業を通し、SDGs への理解がさらに深まっていった。いいことであるが、11 月は TA の指導のもと毎週原稿の修正に追われ大変な日々であったと思う。以下は冊子の「あとがき」にある学生のコメントを書き写す。

今回の滑川での取材を通して私たちは、SDGs が持つ意味を知り、必要性を強く感じました。もしこの SDGs という「ものさし」がなかったら、今回の私たちの取材は何か漠然とした発信で終わってしまったと思います。しかし、SDGs という「ものさし」があることで、私たちはゼミ生同士、取材先の方々と共通の視点で話を深めることができました。各取材先の取り組みに、SDGs の「ものさし」を当てることで、それぞれの仕事が SDGs の何番にリンクしているかを可視化できました。些細なこととは思いますが、これが私たちの今回の成果だと思います。

「各取材先の取り組みに、SDGs の「ものさし」を当てることで、それぞれの仕事が SDGs の何番にリンクしているかを可視化できました。」というコメントは印象的である。12 名の学生は今後、SDGs の視点で研究テーマを探究し、答えが見えない課題が山積する社会でその解決に取り組み、次の社会を作る準備をこの事業を通して開始できたことが指導者の立場からは成果と感じる。

以下は、この事業を通して今年度の学生の意識の変化である。毎年、社会人基礎力（経済産業省、2006）の 12 の要素を指標とし事前事後の意識の変化を平均値比較した結果である。評価の尺度は 4 件法（1. まったく思わない、2. あまり思わない、3. やや思う、4. とても思う）である。

参考までにご覧いただきたい。

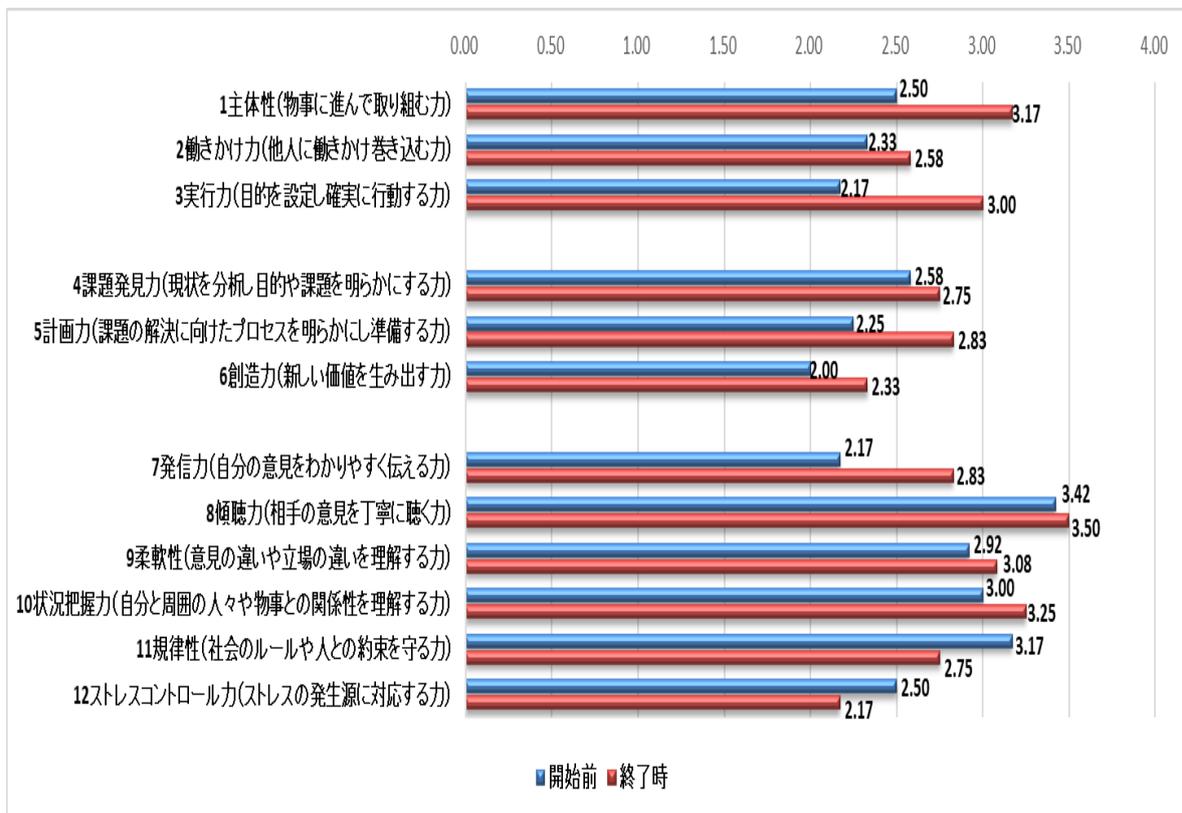


図5 令和元年度生 社会人基礎力に関する意識の変化(事前・事後の平均値の比較)

この平均値の差をコンピュータでt検定したところ、以下の5項目に有意差が現れた。

■前に踏み出す力(アクション)—1歩前に踏み出し失敗しても粘り強く取り組む力—

- 1. 「主体性(物事に進んで取り組む力)」 (1%水準で有意差, 効果量大)
- 3. 「実行力(目的を設定し確実に行動する力)」 (1%水準で有意差, 効果量大)

■考え抜く力(シンキング)—疑問を持ち考え抜く力—

- 5 「計画力(課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力)」 (5%水準, 効果量中)
- 6 「創造力(新しい価値を生み出す力)」 (5%水準, 効果量中)

■チームで働く力(チームワーク)—多様な人々とともに目標に向けて努力する力—

- 7 「発信力(自分の意見をわかりやすく伝える力)」 (5%水準, 効果量中)

1. 「主体性(物事に進んで取り組む力)」と3. 「実行力(目的を設定し確実に行動する力)」に1%水準で有意差(効果量大)が現れ、5 「計画力(課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力)」、6 「創造力(新しい価値を生み出す力)」に5%水準(効果量中～大)にも有意差が現れた。7. 「発信力(自分の意見をわかりやすく伝える力)」にも有意差が現れ、事業を通して学生の成長したことが見える。学生を育てる立場の教員としては、学生自身がこれらの力の伸長を感じていることが、シラバスの妥当性と本事業に取り組む意義を示す根拠となり、手ごたえを感じている。